

わが町

大磯町

みどりを活かしたまちづくり



大磯町は、神奈川県土のほぼ中央部で南に広がる相模湾に面し、北部の穏やかな丘陵地に挟まれた東西に細長い平坦地により町は形成されています。

北部の高麗山から鷹取山まで連なる大磯丘陵は、良好な自然環境を有する地となっており、南の海岸部は



海辺の環境とともに松林が連なり、海からの風を防ぐ役割を果たしています。市街地は、旧東海道の街道筋に松並木が残され、住宅地とともに地域環境を形成しています。

東京駅からJR東海道本線の下りの電車に乗ると、沿線に山が見えるのは大磯町から始まります。

右側の車窓から高麗山、浅間山、王城山、羽白山と緑に被われた山並みが続き、通勤帰りの人は、この緑で仕事の疲れが癒され、旅行をする人は旅の始まりを感じるのではないのでしょうか。

緑豊かな自然に恵まれた丘陵、平地、海岸で形成された風光と気候に



着目して、明治18年に陸軍軍医総監であった松本順氏が日本で最初の海水浴場(当時は「潮もみ」と言われた)を開設し、この頃から政財界の邸宅が海岸沿いに建ち並び山手地区には別荘群が形成され、大磯は全国にその名を知られるようになりました。明治41年には日本新聞社が国内で避暑地百選の全国投票を行い、大磯が第1位に選ばれた記念として「海内第一の避暑地」の石碑が大磯駅前 に建てられています。残念ながら、現在では邸宅の数は減ってしまいましたが、当時の面影は今も残っています。

また、麓の部分はタブノキ・スタジイ林が今も残されており、冬の低温で落葉する二次林の主な構成種であるコナラ・クヌギ・イヌシデ・アカシデなどを主としたコナラ林やシデ林が多く見受けられます。東海道沿いの松並木は、通過するドライブには一服の清涼剤となり、海岸線の松林は海岸地帯と平行に带状に連なり緩衝緑地としての役割を果たしており、砂丘には町の花でもあるハマヒルガオを始めコウボウムギ、ハマボウフウ等の植物の群落が続いています。しかし、このような恵まれた自然にも開発の波が押し寄せ、緑が減少しています。

このような中で、旧吉田茂邸等の歴史的建造物の保存を含めた市街地の緑地保全、山間地及び海岸部の自然環境保全に向けて住民参加で秩序ある町づくりが進められています。

豊かな自然に恵まれた大磯町の資源を次世代に引継ぐため「紺碧の海に緑の映える住みよい大磯」をキャッチフレーズに努力していくことが重要なことと思います。